13. 肝細胞癌における血清銅と，血漿フィブリノーゲンの意義

銅治　康之・笹川　哲哉
渡辺　雅史・市田　文弘（新潟大学第3内科）

悪性腫瘍の合併より，血清銅，血漿フィブリノーゲンが高値となることが言われているが，今回我々は肝細胞癌38例，肝硬変34例について血清銅，血漿フィブリノーゲンについて検討し下以の結果を得た．

1. LC, HCC s̄LC, HCC c̄LC の3群で，血清銅値は有意差があり，HCC s̄LC, HCC c̄LC, LC の順に高値を示した．血漿フィブリノーゲンは，LC と HCC c̄LC の群の間で，有意に LC 群が低値を示した．

2. HCC 群で，血清銅の高値の群と，低値の群の2群に分け生存率を検討し，血清銅の高値の群は，その予後は不良であった．血漿フィブリノーゲンも同様に検討したが，生存率に有意差を認めなかった．

14. 当院における原発性肝癌に対するTAE の経験

佐藤　攻・清水　武昭（信楽園病院外科）
金子　一郎・大村　康夫（新潟大学第1外科）
曽我　憲二・太田　宏信（　同　第3内科）
阿部　実

当院における原発性肝癌に対する TAE 治療例をまとめた．当科の TAE の方法は，ADM-リピオドール懸濁液をまず動注し，次いで MMC を浸透させたスポンゼルで塞栓をおこなっている．昭和58年から60年9月までの期間に原発性肝癌13例に対して TAE を施行した．13例中11例は肝硬変症例であった．AFP 値は6例が正常例であった．癌腫の局在は，1区域に限局するもの4例，巨大で右葉全体を占居するもの4例，多発性のもの5例であった．初回 TAE 後の経過は，3年生存例1例を含む4例が1年以上生存していた．現在生存中の症例は7例である．死亡例6例の死因は，肝不全4例，肺転移2例であった．

最近，TAE 後肝切除しえた1例を経験した．50才男性で HBs Ag 陽性例であった．TAE により主腫瘍は90%以上壊死状態であったが，偽被膜周囲の娘結節および主腫瘍から離れた娘結節は癌細胞が残存していた．

II. シンポジウム

アルコールと肝

司会　新潟大学第3内科　上　村　朝　輝

1. 肝におけるアルコールの代謝

石　原　　清（新潟大学医療技術短期大学部）

Et OH は主として ADH 系により，一部は MEOS により酸化をうけ Ac CHO に変化する．Ac CHO は直ちに ALDH により酢酸へと酸化される．Et OH 常用による酵素誘導は MEOS にのみみられ，ADH や ALDH には起らない．ADH や ALDH には幾つかの同位元素が存在し，人種間による分布の相異が明らかとされている．特に CRM（酵素活性のない $ALDH_2$）は東洋人に多い飲酒時の顔面紅潮に関係するといわれている．Et OH の酸化には補酵素 NAD の還元が共軛するが，Et OH の代謝が亢進すると NADH/NAD 比が増加し，redox potential の shift が起る．これに伴い関連する反応系は shift を修復する方向へと強い影響をうけ，最終的には細胞内に中性脂肪の蓄積をもたらし，脂肪肝が成立すると考えられている．さらに肝線維症，肝硬変への進展因子として，中毒物質である Ac CHO や過酸化脂質の関与が注目されている．

2. 急性アルコール性肝炎の臨床像と転帰

桧　森　昌　門（新潟大学第三内科）

組織学的にアルコール性肝炎と診断された症例について，他のアルコール性肝障害と臨床像の比較検討を行なうと，脂肪肝を除き，自他覚症状には差がみられなかった．PPCF c̄LD と診断された症例では，自他覚症状，臨床検査成績でアルコール性肝炎と有意差を認めるものはなく，数量化理論第2類による変量解析にても，PPCF c̄LD 群とアルコール性肝炎群の間には Overlap が認められた．PPCF c̄LD 群のうち，Overlap 群について検討すると，入院後3週間以上経過してから肝生検を施行された例がほとんどであり，アルコール性肝炎で入院安静禁酒により，組織学的所見の速やかな改善が認められることを合わせて考えると，PPCF c̄LD 群では入院時アルコール性肝炎の診断可能の症例が含まれていたと考えられる．以上から，アルコール性肝炎が疑われる場合，入院後の速やかな肝生検が必要と考えられた．